

奈良・平城宮・京跡

1 所在地 奈良市佐紀町・二条大路南二丁目・二条町、大和郡山市九条町

2 調査期間 平城宮北面大垣地区 一九八五年(昭60)三月～四月、同南面大垣壬生門東地区 一九八五年三月～八月、同南面大垣壬生門西地区 一九八五年六月～一〇月、同推定第一次朝堂院東朝集殿地区 一九八六年一月～四月、同馬寮地区北方 一九八六年一月、右京八条一坊十三・十四坪 一九八五年七月～一九八六年一月

3 発掘機関 奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部

4 調査担当者 岡田英男

5 遺跡の種類 宮殿・官衙跡・都城跡

6 遺跡の年代 奈良時代～平安時代初期

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

一 北面大垣地区(第一六四―一次調査)

本調査は市道拡幅工事に伴う事前調査で、宮北端部の西寄りに位置する御前池の東岸沿いの池底に四カ所の調査区を設定した。四カ所の調査区のうち北面大垣推定地に設けた第Ⅱ調査区で、大垣推定

線上に北面大垣に先行し宮北限を区画する施設と考えられる掘立柱東西塀一条、その北側に素掘りの東西溝二条を検出した。二条の東西溝のうち東西塀の北約八・二mにある溝は、北面大垣の北濠に相当する可能性がある。第Ⅱ調査区の北に設けた第Ⅲ調査区では、東西塀の北約四一mで、一条北大路北側溝の可能性がある素掘りの東西溝SD〇三を検出した。この溝は後世の大きな削平をうけていて、現状では幅約三・七m、深さ約〇・五mを測る。溝底中央部は一段深くなり、幅約〇・五m、深さ約〇・二mの細い素掘りの溝となる。木簡はこの溝から二点が出土した。このうち一三点(削屑七点)は上層の溝SD〇三Bから、下層の細溝SD〇三Aからも削屑九点がそれぞれ出土した。上層溝の堆積土からは平城宮軒瓦編年第一期の軒瓦が出土している。

二 南面大垣壬生門東地区(第一六五次調査)・西地区(第一六七次調査)

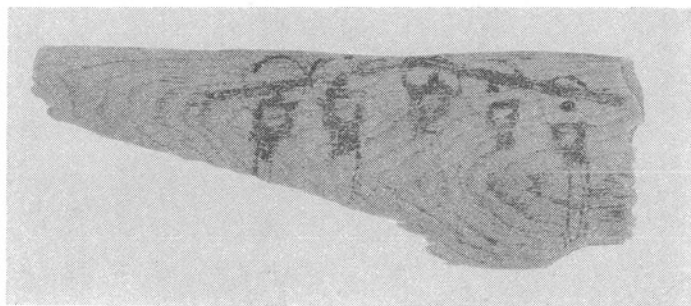
調査区はそれぞれ第一二二次調査区の東と西に接する位置にあり、宮南辺東方にあたる。検出した主な遺構には、南面大垣、二条大路とその南北両側溝、宮内道路二条とその側溝、壬生門内東官衙及び西官衙を囲む築地塀、左京三条一坊八坪の北面築地等がある。両次の調査では、南面大垣の築成・改修・補修の事実を確認し、また、新たに第二次朝堂院の南方、壬生門を挟んで東西に二区の官衙の存在を確認した。木簡は、壬生門の南を東西に走る二条大路北側溝S

D一二五〇と、第一六五次調査区の南面大垣北の宮内道路路面上で検出した土壌SK一二五〇から出土した。SD一二五〇は南面大垣の南約八mにある幅約三・五m、深さ約〇・九mの素掘りの東西溝で、南北両岸の所々には護岸の木杭がのこる。第一六五次調査区内では堆積土は大きく五層に分かれ、最下層及びその上の層から木簡四五点（削屑一七点）が出土した。また、第一六七次調査区内では堆積土は四層に分けられ、最下層から木簡四点が出土した。伴出遺物としては木製品・瓦・土器等があるが、なかでも一六五次調査区内では、人形三〇点・斎串六点・剣形一点等、壬生門附近での祭祀に関わる木製品が比較的多く出土した。SK一二五〇は壬生門内東官衙あるいは南面大垣の修営に関わって掘られた土壌と考えられ、多量の木屑・加工板や茅負・漆塗片櫃等とともに木簡三二一点（削屑二六七点）が出土した。また建物の立面に似た絵を描いたとも考えられる墨画のある木屑も出土した。

三 推定第一次朝堂院東朝集殿地区（第一七一次調査）

調査区は推定第一次朝堂院地区南東部にあたり、第一三六次調査区の東と南に接して東区と西区の二カ所の調査区を設定した。検出した奈良時代の主な遺構は、掘立柱建物五棟、掘立柱塀四条、溝六条、土塋等で、1～4の四期に区分できる。本調査では、推定第一次朝堂院東南部の区画施設に関する新知見を得ることができたが、この一郭にも朝集殿が存在しないことが確認された。木簡は南北溝

SD三七六五と南北溝SD三七一五、土壌SK〇九及び整地土から出土した。西区の中央を南流するSD三七六五は、奈良時代初頭の1期、宮造営当初に第一次朝堂院の東辺に掘られた素掘りの溝である。幅約一・六m、深さ約〇・六m。木簡四点が堆積土中から出土した。伴出遺物には平城宮軒瓦編年第一期の軒平瓦がある。SD三七一五は、奈良時代前半から中頃までの2期にSD三七六五を埋めたのち、その東約二〇mに掘られた素掘りの溝で、奈良時代後半3期まで存続する。幅約三m、深さ約〇・六m。木簡二七点（削屑九点）が出土した。溝の堆積土は大きく二層に分かれるが、出土土器・瓦とも幅広い時期にわたるものが混在していて各層には大きな年代差はない。東区東端で検出したSK〇九は南北約三・六m、東西約二・四m、深さ約〇・七mの不定形土塋で、底に多量の木片が堆積しており、その中から木簡二一



第165次調査出土墨画木屑

一点(削屑二〇三点)が出土した。平城宮土器編年第一期の土器が伴出している。またSD三七六五を埋めた整地土中から削屑一点が出土している。

四 馬寮地区北方(第一六四―二二次調査)

本調査では発掘面積約一〇㎡の調査区のはぼ中央に幅約四m、深さ約〇・七mの素掘りの東西溝SD一二三四を検出した。この溝は、西延長上に伊福部門の存在が推定されることから、伊福部門から東へ延びる宮内道路の北側溝にあたる可能性がある。溝の堆積土は上下二層に分けられ、木簡は下層から九点出土した。伴出した土器は平城宮土器編年第V期のものが主体をなし、また軒瓦も奈良時代後半に属する。

五 右京八条一坊十三・十四坪(第一六八次調査)

本調査は大和郡山形市が計画した北部清掃工場の周辺整備事業に伴う事前調査で、調査区は坪境小路を挟んで十三・十四両坪にわたる。検出した遺構は掘立柱建物五八棟、掘立柱塀一六条、坪境小路一条、井戸一〇基、土器埋納遺構一〇基等である。本調査では十三・十四両坪の宅地割・土地利用の状況が明らかとなり、四期に及ぶ時期変遷が確認された。十四坪については、奈良時代前半終り頃から奈良時代の中頃に掘立柱塀で区画された三二分の一町の小規模宅地四区が存在し、いずれも宅地内西方に南北棟身舎四間×二間東庇付き掘立柱建物、東方に井戸一基を配置する画一的構成をとることが注目

される。また胞衣壺を出土した産屋とみられる掘立柱建物も検出した。調査区内十四坪の西辺に位置する宅地内で検出した井戸の側板に墨書が認められた。この井戸は奈良時代前半から中頃まで存続した。

8 木簡の積文・内容

一 北面大垣地区

東西溝SD〇三B

(1) 「養老三年閏七月」

187×10×3 011

(2) 「四斗七升」

(132)×20×3 019

東西溝SD〇三A

(3) 八年

091

(1)は左右両側面が、(2)は左側面がそれぞれ二次的に削られている。

二 南面大垣壬生門東地区・西地区

二条大路北側溝SD一二五〇

(1) <上総国□□_(望 陋カ)×

(50)×19×3 039

(2) ・「尾張国

・「□

(65)×(17)×2 081

(3) ☐始馬依黑子^{年十九}☐右^{鼻カ}☐

☐信濃国☐ (93)×(19)×4 081

土壌SK二二〇五〇

(4) ☐分錢五百文^{一石塩五升} ☐本三尺末^{二カ}×

☐四尺 末三尺五寸高一丈☐× 203×28×4 011

(5) ☐西郷豊^{乃カ}☐里白米五斗 176×26×4 033

(4)は下端が二次的に切断されている。

三 推定第一次朝堂院東朝集殿地区

南北溝SD三七六五

(1) ☐酒人宿祢^{中臣カ} ☐日佰伍拾老^拾☐

☐ (156)×(14)×5 081

(2) ☐大初位下 ☐ (110)×(10)×5 081

南北溝SD三七一五

(3) 「散位寮☐ ☐ (75)×(14)×2 081

(4) ☐工石床月米五斗八升^{七月料者}

☐八月上半月料三斗☐ 167×26×5 032 *

土壌SK〇九

(5) ☐毛野朝臣廣人^{上カ} 091

(6) ☐里弓削子首☐ 091

(7) 受財而 091

(4)は工石床の七月分と八月前半半月分の月料に付けられた付札。

裏面下端近くにある異筆は月料を受領したしるしか。(5)にみえる上毛野朝臣広人と同名の人物が『続日本紀』にあらわれる。養老四年(七二〇)に按察使として陸奥に赴き、蝦夷の反乱で殺害されている。両者が同一人物としても、(5)が出土した土壌の年代観と矛盾はしない。

四 馬寮地区北方

東西溝SD二二三四〇

(1) ☐讃岐国多度郡藤原郷伊☐首智万庸米六斗

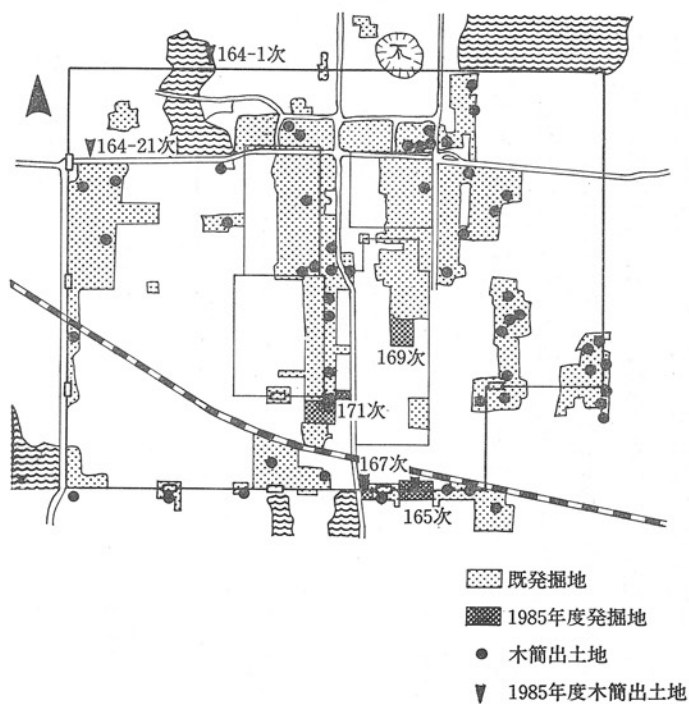
- ・「神亀三年九月」
192×23×6 051 *
- (2) □□田主三四
二斗宝亀四年 >
(165)×35×9 033 *
- (3) ・「若狭国」
「遠カ」
「遠カ」×
(156)×17×5 019
- ・「天平勝宝四年」
(85)×18×3 019
- (4) ・
「三カ」
斗
(85)×18×3 019
- (5) ・
「郡カ」
「郷庸カ」
宝
「亀七カ」
年十月二日
(181)×16×7 059
- (2)は二次的に左右両側面を削って文字の方向とは逆に上端を尖らせ、下端左右に切り込みを入れる。裏面は中央から上端にかけて浅くえぐる。現状は荷札・付札に通常の033型式であるが、原型011型式もしくは031型式の木簡を付札に転用するために天地を逆さにして二次的に整形したものか。あるいは裏面の浅いえぐりが何らかの機能を果たしたものだとして、付札への転用ではなく木器への転用となり、型式番号も065型式とすべきかもしれない。

五 右京八条一坊十三・十四坪
井戸
(1) 「私」
「口カ」
笑竹
稲三
稲三

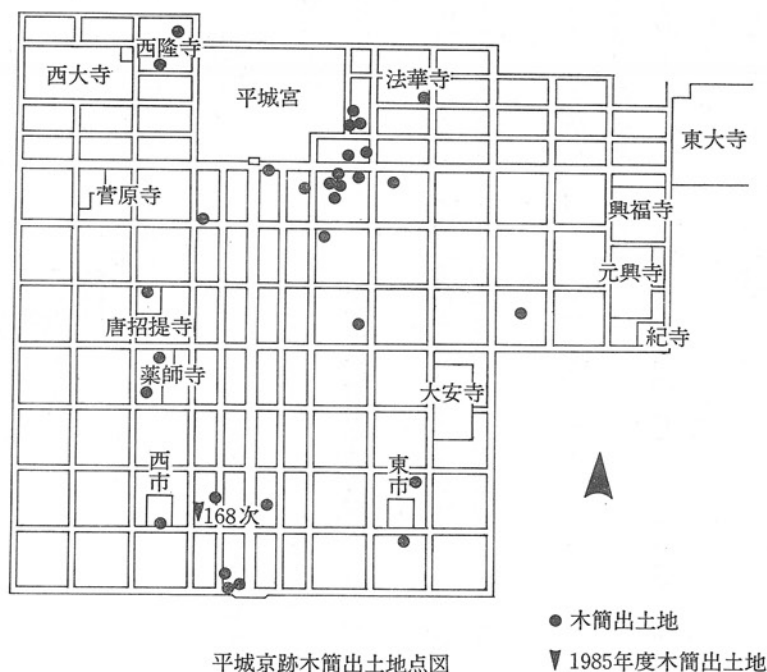
弊医私和笑竹
和
稲三
稲三
稲三
「
790×186×39 061

9 関係文献

- 奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所年報一九八六』
(一九八六年)
- 同『昭和60年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』(一九八六年)
- 町田章「平城宮跡の昭和六十年発掘」『奈良県観光』三五六号
一九八六年
- 花谷浩「推定第一次朝堂院地区の調査」(同右)
- 同「南面大垣の調査」(同右)
- 工業善通「平城京右京八条一坊の発掘調査」(『奈良県観光』三五二号
一九八六年)
- 杉山洋「十三・十四坪の遺構」(同右)
- 上野邦一「十四坪の宅地」(同右)
- 服部伊久男「十三・十四坪出土の遺物」(同右) (橋本義則)



平城宮跡木簡出土地点図



平城京跡木簡出土地点図